貴女は――。

勘違いをしていたのだ。

貴女は己が世界の一部でしかないことを、それも瑣末な、世界にとっては全く以て不必要な余剰部品でしかないと云うことを、まるで認識していなかったのだろう。

私も同じだ。

もし、貴女が私と同じ勘違いをしていたとするならば――貴女もまた、世界の方が己の一部だと思っていたと云うことになる。

ならばそれは――誤りだ。

私もまた、勘違いをしていたようだ。

否、私こそ何も解っていなかったのだろう。

私は、私の存在するこの世界を何ひとつ識らなかったのだ。識っているつもりになっていただけだ。

私は世界に対して余りにも無知である。

個人が識ることが叶うのは、世界の、ほんの一部でしかなかったようだ。否――一部と云うのも烏滸がましい程に、それは卑小なものらしい。

世界の凡てと比するなら、個人の知り得る情報は無にも等しいものなのだ。

砂漠に対する砂一粒、否、それ程の価値もないに違いない。

私は――。

今、小淘綾の磯に臨む場所に立ち、貴女と、空と海と砂浜を眺めている。

貴女は小さい。

空と海の下の貴女は迚も小さい。

私もまた、貴女以下に小さいのだろう。そうした当たり前のスケール感が、私には圧倒的に欠落していたのである。

貴女もそうだったのだと思う。

貴女もまた、海や空や砂浜と己を、同じ大きさだと思っていたのだろう。否、自分の方が大きいとさえ感じていた筈だ。

磯を渡り、浜を抜けて、初秋の風が私に届く。

私の指先に、風に舞った砂粒がひと粒付いた。

私達は――。

この砂粒くらいの大きさしかないのだ。

私も貴女も、この偶か指先に付いたひと粒の砂なのだ。その砂粒を腹中に収め、それで砂浜全部を呑んだかの如き勘違いをして生きていた、道化者だ。

例えば――。

砂漠にとって砂ひと粒など決して必要なものではないだろう。あってもなくても良い、如何でも好いものだ。

勿論、砂なくして砂漠は在り得ない。砂漠は砂で出来ている。砂は、砂漠を形成する殆ど唯一無二の要素ではあるだろう。

けれども。

重要なのはひと粒の砂そのものではなく、その量なのだ。砂は、ひと粒では砂漠と呼ばれることはないし、砂漠を造ることも出来ないのである。

砂漠と云うのは、砂が無量にある様なのであって砂粒そのものではないのである。砂がひと粒減ろうが増えようが、砂漠は小揺るぎもしないだろう。そうなら、砂漠にとってひと粒の砂は、要らないものでしかないではないか。

だから――。

砂ひと粒程度のボリュウムしか持っていない私達は、慥かに世界を構成する要素には違いないのだけれど、世界にとって必要不可欠なものとは決して成り得ないのだ。

砂漠を持ち出すまでもないだろう。

眼前に広がるこの砂浜と比しても、その差は歴然としている。
無限に寄せては返す濤に晒され続けて猶、砂浜は砂浜として此処に有り続ける。砂浜は無量の海水をも呑み込み、吐き出してしまう存在である。しかし波に渫われ海中を漂う砂粒はどうか。
砂粒は、浜を離れた段階でもう砂浜ではない。それは海中の塵芥ですらない。大海に投じられたひと粒の砂は、海水の中にあって、既に無である。
否、砂粒を消し去るのに海は大袈裟だ。一滴の水で充分だろう。ひと粒の砂は、たったひと雫の水滴にも吸われてしまう程に儚く無力なものなのだ。
たった——ひと雫の。
ひと雫の水滴に流され呑まれ、紛れて消えてしまう程の砂粒と、大海が繰り出す荒浪を呑み込み吐き出す砂浜とは、同じ質ではあるけれど、矢張りまるで違う存在なのである。
私には、その差違が解らなかった。

貴女にも解らなかったのだと思う。
貴女もまた、ひと粒の砂を腹中に呑んでいるだけなのにも拘らず、世界を呑み込んだかのように振る舞っていたのだろう。
違うだろうか。
例えば——。
貴女は、己の一挙手一投足が、一喜一憂が、世界の様相を一変させ得る力を持つと、そう考えてはいなかったか。
私は——何処かでそう信じていた。
悲しければ空が涕き、虚しければ海が哭くと。
泣いているのは己だけなのに。
凡ては私がそう感じていると云うだけのこと。私が泣こうが叫ぼうが、死のうが生きようが、世界は何も、何一つ変わりはしない。雨は勝手に降り風は勝手に吹くだけである。陽が沈まぬ宵はないし、陽の昇らぬ朝はない。
私の存在は世界の在りようと何等関係ないのだ。

否——。
私もそこまでは解っていたのだ。貴女も真逆自分が天地の運行を変えられる超越者だなどと思っていた訳ではないだろう。
でも。
私に関して云うならば、改めてそう思いたくはなかったし、それは違うとどこかで思ってもいたのだと思う。何しろ私は、己が瑣末な砂粒に過ぎぬと云うことを認めてはいなかったのだから。
私は、私が滅ぶ時世界も滅ぶんだと、多分そんな風に思っていたに違いないのだ。
それは幻想だ。
大いなる錯誤だ。
己と世界は同等だと——。
或いは己こそが世界だと——。
或いは己が世界の中心に居ると——。
何れも間違っている。
あの奇妙な男が教えてくれたことだ。

私達は、卑小だ。世界に比する時、質量は限りなく無に等しくなる程に、卑小だ。
加えて、世界の構成要素であることと、世界そのものであることは、同義ではない。
そして——世界に中心などない。
あったところで、それは個人如きに見定められるものではないだろう。
中心だと思うなら、それは己の中心だ。
其処には、砂がひと粒あるだけなのだ。
自分の真ん中に、役立たずの砂粒がぽつんとひと粒あるだけなのだ。
その瑣末なひと粒だけを拠り所にして、それが己以外の凡てにとっても特殊なものなのだと、そう固く信じ込むことに拠って、貴女は、私は——否、私達は、恰も世界の真ん中に立っているかのように錯覚していたに過ぎない。
錯覚なのだ。
その証拠に——。

私が世界に向けて投げ掛けた言葉は、思念は、実は誰にも届いていなかったのだから。私は、私に向けて叫んでいただけなのである。私はただ自分の真ん中で、自分にしか聞こえない声で、わあわあ喚いていただけなのだ。

滑稽だ。

仮令それが、私にとってどれ程深刻な、私自身を滅ぼす程に重く過酷な事象であったとしても——外から見た私の姿は、些事に右往左往するだけの滑稽な有り様としか映らぬものであったろう。

貴女も、また滑稽だ。今はそう思える。

でも、愚かだとは思わない。

そうした錯覚をすること自体は、一概に責められることではない。

それで当たり前なのだと、あの男は云った。

人は、誰しもそうした勘違いをして生きている。

否、勘違いをしなければ生きて行けぬものであるらしい。

自分が特別だと、自分と世界は同等だと、自分が世界の真ん中に居るのだと、そう思い込まなければ生きて行くのが難しい時と云うのは、矢張りあるのだ。逃避することで漸う向き合える現実と云うのもあるだろう。

何しろ——。

私達の掌にはひと粒の砂しかないのだから。

だから私にとって、否——誰にとっても、そのひと粒が何ものにも替え難い、特別な砂粒であることは疑いようがないことなのだ。

何しろ、それ以上の、そしてそれ以外の砂粒を手に入れることは、私達には決して出来ないことなのであるから。

それは、特別なものであるに違いない。

私にとっても、貴女にとってもそうだったのだろう。でも、それは私や貴女にとって特別なものだと云う、それだけのことである。

砂粒は所詮砂粒に過ぎない。

当人以外の凡ての者にとって、それは特別なものではあり得ないのだ。それは他者から見れば只のつまらない砂粒でしかないし、砂浜から見れば無限分の一のボリュウムしか持たない、要らぬものでしかないのだ。

だから。

それは逃避なのだと、それは勘違いなのだと、そして自分以外の誰もがそうした勘違いをしているのだと——きちんと識っていたのなら、それはそれで良かったのだろう。

でも、私は解っていなかった。

その場合、錯覚は驕りともなる。

凡ては自分のボリュウムを無限に拡張しただけの驕慢、現実逃避の幻影に過ぎないからだ。

私は驕っていた。

何も解っていなかったのだ。

己こそが砂浜と思い込む者にとって、他者は遍く砂粒としか認識出来ないだろう。

己にとって特別な価値を持つ者——己の一部となった者以外は、皆、くだらない砂粒に見えてしまうのだ。己を砂浜だと勘違いしている限り、自分以外の者は世界——自分を構成する一要素——砂粒に過ぎないのだから。

自分もまた砂粒に過ぎないと云うのに。

貴女にとって、私もまた砂粒に過ぎなかったのだろう。私にとってあの男が砂粒に過ぎなかったように。

それこそが私の最大の錯誤であったろう。

その結果——。

私は、許されざる罪を犯してしまった。

決して償い切れぬ罪である。

貴女の所為ではない。

私が間違っていただけだ。

貴女は私に一滴の雫を呉れただけだ。

そして貴女が私に呉れた一滴の雫は、私をすっかり吸い込んでしまった。

私が砂粒に過ぎなかった何よりの証しである。
貴女の呉れた雫が果たして邪悪なものだったのか否か、私には判断することが出来ない。ただ、それがどれだけ邪なものであったとしても、勘違いをしていた私にとって、それは限りなく魅惑的な一滴であったことは疑いようがないことである。

邪魅の雫――。

私は邪魅の雫に吸われてしまったようだ。
でも、こうなった今、私は決して貴女を怨んではいない。勿論蔑んでもいない。
貴女が何を想うのか、私には解らない。海辺にひとり取り残された貴女の胸中に、一体何が去来しているのか、私には推し量ることすら出来ない。貴女にも私の真情など解りはしないだろう。
あの女性はどうするのでしょう――。
背後で、彼が呟いている。

私には、その問いに対する答えはない。
今――私の目に映っている貴女は、邪悪なものではない。私同様、卑小で、滑稽だ。凡百存在と同等に、卑小で滑稽である。
それで――いいのだ。
これまで私の見ていた世界も、貴女の見ていた世界も、蛤の吐く蜃気楼のようなものなのだろう。
私達は蛤に呑まれた砂粒だったのかもしれぬ。
私は蛤の腹から出て、海中に紛れよう。
償い切れない罪を償うために。
貴女は如何するのだろう。
あの大きな空の下に、まだ蜃気楼を見続けるのだろうか。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。